

		成果と課題					
		1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語		正しい文字を丁寧に書くように指導を続けてきたことで、いつでも丁寧な文字を書ける児童が多くなってきた。しかし、正しい書き順でひらがなや漢字を書くことができない児童もいる。 短い文章を書く活動を積み重ねることで、「はじめ・中・おわり」を意識した文章を書くことができるようになってきた。会話を入れたり、気持ちを言葉にしたりすることが難しい児童がいる。	他教科で体験したことや行事など、児童にとって身近な経験を題材に選び、主体的に書くことができた。また、始め、中、終わりを意識したことにより、自分の経験を順序立てて考えることができた。対話や交流を取り入れたことで、多様な考えを聞き、また自分の考えを伝えることができる児童が増えた。語彙力に個人差があるので、言葉を大切に、豊かにしていく指導が必要である。	成果は、2つある。第一は、言語の能力が上昇してきたこと、第二は表現力が上昇したことである。漢字の広場や漢字の授業改善を行ったことで語彙が増えた。また、日々、作文の指導をしたことで表現力が身に付いた。 課題は、内容の理解で満足する児童を減少させることはできなかったが、十分ではなかったことである。国語科の楽しさの一つである多様な読みをしていいことを教師側が理解して学習させることが必要だと考える。	物語文や説明文の読みは、児童がめあての達成に向かって学習しながら、行動や会話、文章構造や段落のつながり等を捉えられるよう、授業を工夫することができた。 書くことに時間がかかる児童も多く、十分に書いた文章を読み返したり、友達と推敲し合ったりすることが難しかった。 話の中心を明確にし、学習形態を工夫し、話す練習をし合うことで、自信をもって話すことができるようになった児童が多い。聞くときにはメモをとる習慣が身に付いた。	計画的に新出漢字に取り組んでことで習熟を図れた。物語文においては自分たちで課題を設定し、課題を解決していくことで、主体的に学習をしていた。 書く活動においては、時間が足りず、短いスパンで見直すことができなかった。 聞くことにおいては、大切なことをメモすることに課題がある。	定期的に自分の考えや意見を書く活動を取り入れたことで、目的に応じて、文章を書く力が高まった。しかし、要点をまとめて書くことができない児童もいたため、個別指導が必要だった。 文の構成や語句の学習では、自主的に国語辞典を活用する児童が増え、語句に関する関心を広げることができた。個人差はあるが、言語の力が伸びた。
	社会			成果は、2つある。第一は資料の読み取る技能が向上したこと、第二は地域の様子に対して、興味・関心が高まったことである。3年生では、3回の社会科見学や地域コーディネーターから地域のことを教えてもらう等、多くの体験学習、調べ学習をしたことが効果的だった。課題は、どうしても友達や教師の支援がないと資料を書くことができない児童がいたことである。支援なしでも書けるようにより丁寧な指導が必要である。	一人ひとりが自分自身の課題をもち、主体的に調査・考察する力を伸ばすことができた。 写真や文献、グラフなど、各資料の特徴を生かして、調べたことを結論付ける表現力もついてきた。しかし、資料から必要なことがらを適切に抽出できない児童に対して、個別での指導が必要であると考える。	ICT機器を活用し、資料の読み取る視点を示すことで、資料を読み取る力は高まった。 全体からポイントを絞って地図を見る活動を取り入れることで、位置関係を把握することができた。しかし、自分から進んで地図帳を活用するということに対しては、教師が声をかけないとできない児童もいる。	資料（文章や写真、表など）から必要な情報を選択し、適切に表現できるようにするために、自分の考えを表現する場や時間を確保することで、資料を活用できる児童が増えた。 社会的事象についての知識や理解を細かく丁寧に指導したが、個人差を埋めることができなかった。
	算数	ブロックなどの半具体物を操作する活動を通して、問題や式の意味理解を深める児童が増えた。 基礎基本の定着を図るために、計算カードを家庭学習に組み込んだ。その結果、基本的なたし算とひき算の力が多くの児童についていた。 演算決定をする場面では、文章を思い込んで読んだり、数値だけを拾って式を書いたりしてしまう児童がいた。図や式、半具体物を使って指導してきたが、演算決定の場面では、難しい児童がいた。	少人数指導を行う中で、グループ内で、自分の考えを伝え合ったり、体験的な活動をしたりして、児童の考える力や技能が身に付いた。 基礎基本の定着を図るために、問題を精選し、繰り返し練習することで理解を深める児童が増えた。 自分でしっかり考える時間を確保することで数学的な思考力や表現力が育ち、主体的に学習しようとする意欲が高めることができた。	成果は、文章問題の説明ができるようになった児童が増えたことである。授業中、友達の考えを説明することや自分の考えを黒板に書いて発表する機会を多く作ったことが成果につながった。 課題は個人差の解消である。少人数による指導は継続して行ったが効果は十分ではなかった。少人数以外にも基礎学習の時間に苦手克服の時間を設ける工夫が必要である。	家庭学習用、授業用のドリルを用いて基礎基本の定着を図ることができた。また、自力解決する時間を確保し、自分の考えをもって学習に取り組めるようにした。授業中にその場で指導したり授業後にノートを回収したりして指導の徹底を図ることができた。 コースに応じて、既習事項など基礎基本の定着を確認することはできたが、児童の実態に合わせた授業を展開することがまだ課題として残った。	習熟度別のコースを工夫することで、児童の実態に合ったコースを選択させることができた。答えの見積もりを出してから課題解決を図ったため、誤答に気付く児童が増えた。 分度器などの操作が苦手な児童がいるため、作図などの活動を多く取り入れたが、一層の定着が必要である。	単元ごとに教師間で児童の様子を共有することで、次の単元に向けて指導の充実を図ることができた。しかし、2学級3展開、1学級2展開のため、学年全体で児童の様子を把握することが難しかった。 自力解決の時間を確保し、自分の考えを他者に伝えようとする意欲が高まった。話し合いのとき、ヒントを与えることで様々な既習事項を用いた表現方法をすることができた。しかし、理解が難しく話し合いになかなか参加できない児童への指導に課題が残った。
	理科			成果は2つある。第一は観察時、記録の仕方が身に付いたこと、第二は結果、考察を書く能力が身に付いたことである。対話的な学習をさせたことで、自分たちの言葉でまとめることができたようになった。 課題は個人差があることである。友達とはまとめられるが一人では難しい児童がいるため、より丁寧な指導が必要である。	問題解決型学習の流れが定着し、どのように課題解決をしていけばよいか分かるようになった。 課題意識を明確にもたせて実験を行うことで、仮説を基に実験方法を考えたり、結果からどのようなことが言えるか考察したりすることができた。 理科的な用語を適切に使う力が弱いので、適宜指導が必要である。	実験の時間を十分確保することで、実験方法を考えたり、疑問をもったりしながら取り組む児童が増えた。結果と考察の違いを区別し、まとめることができるようになった。 実験の結果を日常生活に結びつけて考えさせるような手立てを十分にとることができなかった。	実験の様子や結果後、考察する時間を十分に確保することで、他者との意見や考え方を比べ、共通点や相違点を見付けられることができるようになった。また、話し合いを通して、今までの既習や身近なことと関連付けて考えることができた。 内容は、理解していても、まとめ方が難しい児童への支援が必要だった。

生活	あさがおやチューリップの栽培を通して、「いのち」について触れ、自然との関わりに関心をもって学習に取り組むことができた。また、観察の観点や絵に描くポイントを指導することで、絵や文で表現することが苦手の児童も主体的に学習に取り組むことができた。	一年生や地域の人と交流する中で、他者と関わりながら学習を深めることができた。特に地域との関わりは、保護者の協力を得ながら、商店街の見学や身近な施設の訪問をし、身近な人々について知ったり交流したりすることができた。				
音楽	友達と歌うことの楽しさやリズムをつくる楽しさを味わいながら、主体的に学習に取り組むことができた。 鍵盤ハーモニカの技能には個人差があったが、スモールステップで練習を繰り返した。支援が必要な児童も多くいるので、それぞれの個への対応に力を入れていきたい。	鍵盤ハーモニカの技能の個人差が大きいので、個人練習をする時間を確保し、教え合いなどの支援を工夫する必要がある。 身振りや手話をつけながら歌うことで、楽しみながら表現を工夫することができた。また、手拍子や打楽器などで、リズムを作ったりつないだりする活動を通して、リズムの楽しさを感じることができた。	基礎基本を繰り返して指導するとともに、個人の練習時間を保証し、お互いに聴き合う活動などを通して、歌や器楽演奏などを楽しんで活動することができた。 技能の面でやや個人差があるので、支援を要する児童の指導にも更に力を入れていきたい。	選曲を工夫したり、めあてを明確にしたりして、活動後に振り返りをするにより、もっとこう表現したいという思いや意図が表出し、学年全体としての表現の力が伸びてきた。今後も児童が意欲的に取り組める題材を工夫していきたい。	選曲を工夫したり、めあてを明確にしたりして、活動後に課題の達成度を振り返ることで、学習内容の定着を図ることができた。学習発表会や連合音楽会等で発表の場に多く立ち、ゴールを意識して活動することで力を伸ばしていた。技能の面で個人差があるので、支援に力を入れていきたい。	学習のめあてを明確にし、活動に対して意識するポイントなどの的確な指示を心掛けることにより、指導内容の能力を高めることができた。特に行事を通して表現の能力が伸びていった。 音楽づくりの時間の設定が不十分だったので、短時間でも充実した活動ができるように内容を工夫する。
図画工作	題材を分かりやすくしたり、手順を細かく示したりすることにより、意欲的に制作に取り組むことができた。 題材によって、主体的に取り組めたり、取り組めなかったりすることがあった。自由に自分の思いを表現することが苦手の児童が多いため、支援を続けていきたい。	用具の特徴を十分に理解させ、慣れさせたり、試したり、練習させたりする時間を十分に確保したことで、安全に気を付けて活動しようという意欲を高めることができた。 具体的な例を提示することで、児童がイメージを膨らませて、楽しく創作活動に取り組むことができる児童が多い一方で、自分の思いを表現することが苦手の児童もいるので、よさを認めながら、支援を続けていきたい。	題材の工夫、ICTの活用、児童一人一人への声かけなどにより多くの児童が意欲的に制作に取り組んだ。段階を追って、一つ一つの道具の用法を理解させ、安全指導をすることにより技能が向上した。基本的な技能や制作のスピードにやや個人差があることが今後の課題である。	題材を工夫すしたり、ICTを活用したりすることにより、多くの児童が意欲的に創作に取り組む、その中で基本的な技能も身に付けることができた。活動の導線や手順を工夫することで安全を確保することができた。支援を要する児童に対する指導・助言の仕方を工夫していく必要がある。	題材、テーマの工夫や適切な助言、手順を示すことにより、多くの児童が意欲的に創作活動に取り組み、個々の造形的表現力も高まった。また各学習時間の最後に振り返りを行うことにより、次時の活動への見通しをもって製作に取り組ませることができた。今後も児童の実態に即した題材を工夫し、互いの良さを認め合いながら、アイディアを共有し意欲的に創作に取り組ませたい。	題材、テーマを工夫したり、表現方法に幅を持たせたりすることにより、児童一人一人が意欲的に創作活動に取り組む、個々の造形的表現力が高まった。また、学習カードを使って振り返りや鑑賞を行うことにより、見通しを持って活動に取り組ませることができた。今後も、個々の個性や創造力をいかし、互いの良さを認め合いながら意欲的に創作に取り組ませたい。
家庭					自分の意見や考えを深めたり、広げたりできるように教え合いや学び合いなど対話活動を多く取り入れた。それによって、自信をもって発表しようとする児童の姿が見られた。また振り返りカードの利用によって、自分が今どの作業をしているのか、次に何をしなくてはいけないのか、いつまでに完成させなくてはいけないのかという学習の見通しをもたせることができた。児童の学習意欲に大きく差が出てきているので、意欲の低い児童に興味・関心を持たせることができるよう指導を工夫する。	自分の力量に合わせて作るものや個人の目標を決めたり、休み時間などに補教をし、それぞれの個に応じた指導をしたりすることで、苦手の児童にも作る楽しさや完成したときの達成感などを味わわせることができた。また、長期休業を利用して学んだことを家庭で実践することで、一人ひとりの技能や技術を高めることができた。家庭実践が継続されるよう家庭との連携を深める。
体育	学習カードを活用することで、児童が主体的に学習に取り組もうとする姿を見ることができた。特に、年間を通してなわとびカードに取り組んだことで、なわとびの力が全体的についた。 基本的な運動感覚が身に付いていない児童が多いため、「走る」「跳ぶ」「回る」などの動きの感覚をスモールステップで指導してきた。少しずつ体力が付き、動きも滑らかになってきた。	記述式の学習カードを活用することで、よりよい動きをするにはどうしたらよいかを考える機会を設けることができた。それにより、運動の仕方を意欲的に工夫できる児童が増えた。運動の技能に個人差があるため、場の工夫し、1時間の授業構成を工夫していく必要がある。	成果は2つある。第一は段階別に指導したことで多くの児童の技能が伸びたこと、第二はICTの活用により自分の動きに関心を持つ児童が増加したことである。課題は、二極化の解消には至らないことである。引き続き、児童・教師・教材との対話を行い改善に努める必要がある。	年度当初は、鉄棒やマット運動などの器械運動では、運動能力に個人差が大きかった。そのため、児童が自分自身の体の動きを理解し、技を確実に習得できるよう、映像資料を活用しながらスモールステップで学習に取り組んだ。その結果、器械運動を中心に、運動能力を高めることができた。 めあてを意識して授業を行ったが、児童一人一人に合わせためあての立て方に課題が残った。	自分に合っためあてを立てることができるようになった児童が増えた。動きをオノマトペにすることで基本的な動きを身に付けることができた。また児童がオノマトペを考えるなどの様子も見られ、児童同士の学び合いが深まった。 ICT機器を活用したことで、客観的に動きを見ることで、技能の向上は図れた。	具体的な技能の視点を明確にすることで、自分の技能にあっためあてを立てることができた児童が増えた。 スモールステップのめあてを立て、動画教材や学習の場を工夫することで、意欲的に取り組める児童が増えたが、まだ課題を残る。